音楽科

主体的な学びをひき出す「活動」「課題」を考える

－音や音楽と向き合い，人・自然・社会・文化とかかわる児童生徒をめざして－

（小）桝田祐子　　（中）霜村真由美
（共同研究者）小川容子

１　はじめに

本校音楽科の学習は，音楽を通して自分の内面と対話し，自分を取り巻くもの（人・自然・社会・文化）とかかわっていく活動でありたいと願っている。したがって，「児童生徒が音や音楽に向き合っている姿」が「学ぶ意欲」の表れであり，内面の高まりであるととらえる。そして，「人とかかわり，自然・社会・文化などとの関連に気づきながら，よりよい音楽表現を追究していくこと」が，「実践的な行動力」を育むものと考えている。さらに，音楽表現で得られた感動を仲間と共有することが，次なる学習への意欲につながっていくのである。

そのために昨年度は，本校が独自に開発してきたカリキュラムが，このような学習に適した魅力ある教材からなっているかどうか見直しを図りつつ，児童が主体的に学ぶために，１時間の授業においてどのような「活動」と「課題」を設定したらよいか探ってきた。その中で，「型をまねる」「技をぬすむ」といった習得方法を生かした「活動」は，児童生徒が音楽の特徴を発見し，それを表現するためにはどうしたらよいかを追究できる有効なものであることが明らかになった。しかし一方で，児童生徒一人一人が目標を達成したり，より豊かに学んだりするためには，個に対する支援をもっと働かせなくてはならないという課題もみえてきた。

そこで今年度は，「活動」からのアプローチと「課題」からのアプローチによる授業づくりを支えるものは教師の「支援」であるという考え方に立って，特に個に対する支援を探りながら，児童生徒の学びの質を高める授業づくりに取り組むことにした。

２　本校音楽科の取り組み

（１）音楽科学習のねらい

まず、本校が独自に開発してきたカリキュラムについてふれておく。昨今，私たちを取り巻く音楽状況はクラシックやポピュラー音楽がますます盛んになる一方で，郷土の芸能・祭りといった地域固有の音楽文化が見直され，さらには世界の諸民族の音楽などにも注目している。そこで，本校ではこの状況を生かした音楽学習はできないものかと考え，「音楽は地球みんなのたからもの」というテーマを掲げながら，多様な音楽文化を教材としたカリキュラムを作成し，実践してきている。その実践のキーワードは，音楽を取り巻く文化社会的脈絡（コンテクスト）をいかに絡めた授業展開をするかということである。それぞれの音楽は，その地域の環境や歴史，人々の思想などと密接なつながりを持っており，それを知ることで音楽のもつ意味や価値を見いだせる。単なる演奏活動にとどまることなく，その音楽を生み出した人間のすばらしさを実感し，生涯にわたって生きて働く豊かな感性や探求心を育てたいと願っている。

（２）本校が培いたい３つの力との関係

本校の音楽科で育てたい資質・能力として，「音楽と関わる能力」「他と関わる能力」「表現の能力」「反省的思考の能力」の４つを考えている。それらは本校が培いたい３つの力につながっている。

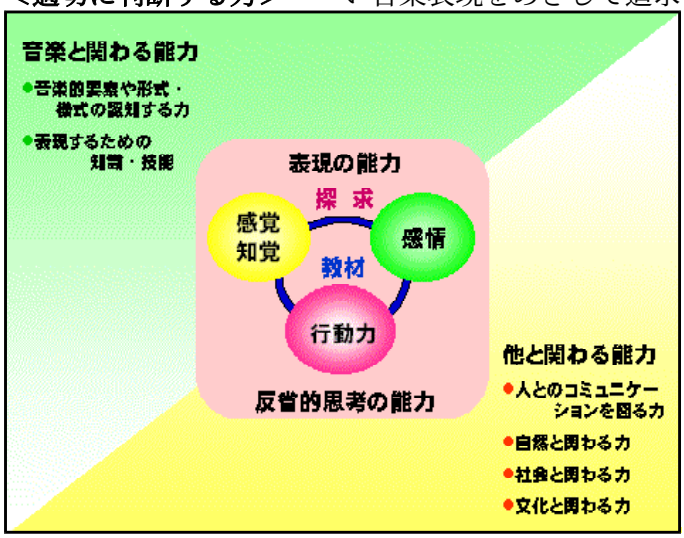
音楽と関わる能力　…　音楽そのものを理解し表現するために必要な能力である。リズム・旋律・音
＜適切に判断する力＞　色といった音楽の諸要素や曲の構成・形式・音楽の様式をとらえたり，発声法や楽器の奏法などの技能を習得したりする力

他と関わる能力　…　音楽を，人間はもちろんのこと，自然や社会，他の文化などとの関連からとら
＜かかわり合う力＞　え，その音楽の意味や価値を見出す力

表現の能力・反省的思考の能力

＜自分を生かす力＞　…「音楽と関わる能力」と「他と関わる能力」を相互に活用しながら，よりよい音楽表現をめざして追求・探求していく力

＜適切に判断する力＞



「音楽と関わる能力」と「他と関わる能力」を共に育てることのできる教材は，音楽そのものだけでなく，音楽と日常生活とのつながり，あるいは遠くはなれた国や地域の人々のくらしや考え方にも触れることができる。それは，子どもたちのあらゆる感覚・知覚を呼び起こし，そこから「もっと知りたい」「自分たちもやってみたい」「こんなふうに表現したい」という感情をふくらませ，実際に表現するという行動へと達する。そして，よりよい表現をめざして探究活動が展開され,「表現の能力」と「反省的思考の能力」が育っていくという考え方である。

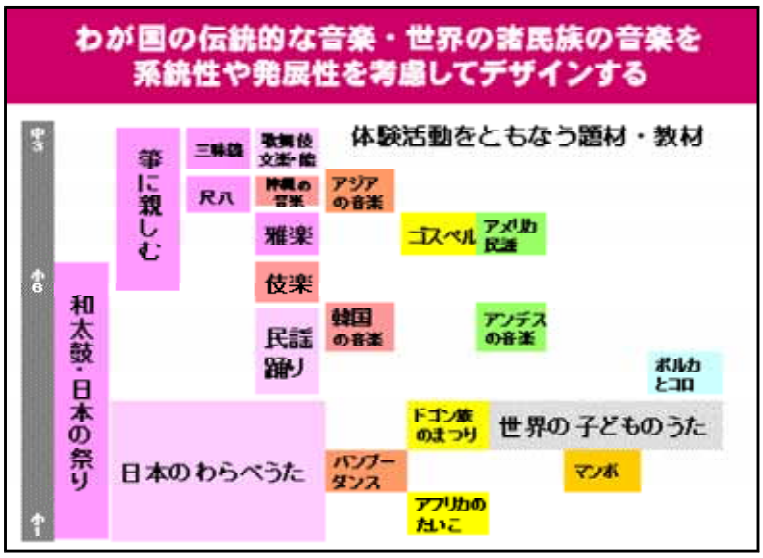
本校音楽科では表現活動を中心に据え，鑑賞は表現のために行うという考え方に立っているため,「鑑賞の能力」は敢えて設けず，感覚・知覚を用いて感受するところに組み込んでいる。そのことによって，むしろ表現と鑑賞の一体化が自然に図られるのである。また,「関心・意欲・態度」については，その題材において，先ほど示した学力モデルの主体的な探求活動が展開しているかどうかを見取ることで評価できると考えている。

（3）小中９年間カリキュラムとマトリックス表

９年間のカリキュラムを編成するにあたって，次の３つの点を考慮した。

○系統性・発展性を考慮しながら，日本の伝統的な音楽・郷土の音楽を含む世界の諸民族の音楽を全学年にわたって，２～３題材を目安に取り入れる。
○小学校では和太鼓，中学校では箏を中心とした学習を積み上げていく。楽器のセッティングの便宜などを図り，全学年同じ時期に取り組むようにする。
○本校の特色を生かしたり，教科書教材を発展させたりして，題材づくりを行う。

このような学習を通して，児童生徒が「音楽ってすばらしいな」「人間ってすごいな」と感じたり，「なぜ，人間は音楽するのか」などと根源的なことを考えたりできることを願って，系統性や発展性を考慮しながら【資料】の小中９年間カリキュラムを作成した。



その際，育てたい資質や能力を各題材でどのように身につけていくのかを明確にするためにマトリックス表を作成している。◎は特に重点をおいて指導したい項目で，題材目標となる内容である。○はこの題材，教材を通しておのずと育っていくであろう資質・能力を示している。学年が上がるにしたがって，「他と関わる能力」の内容項目が増えていくようになっている。

年度末に重点項目の見直しをし，改善を図っている。

３　授業づくりの視点

（１）学びのプロセス

音楽に出会って自分の感覚や思考がひき出され，音楽とのかかわりの中で自分の感覚や思考を発揮することができたとき，さらにその感覚や思考が新しいものにつくりかえられていくとき，子どもたちは本当の意味での楽しさや充実感を感じ，その音楽に夢中になって打ち込んだり，こだわりをもって積極的に親しんだりする。このような主体的な学習が展開できるように，本校では次のような「学びのプロセス」を想定し、題材を構成している。

①本校音楽科の学びのプロセス

１．音や音楽と出会う段階

よさや美しさを感じ取ったり，音楽と人間とのかかわりに気づいたりする。

２．直接体験（主に演奏）を通して，課題が明らかになる段階

「何を」「どのように」表現していくのか。
「どのような」活動を進めればよいのか。

３．課題の解決に向けて，工夫する段階

これまでの音楽体験や既習事項を生かして，表現の仕方を考えたり，そのための練習方法を工夫したりする。

４．自分たちがつくり上げた音楽を楽しみ，その音楽の魅力と自分の学びをみつめる段階

もう一度よさや美しさ、音楽と人間のかかわりについて捉え直し、自分がこの題材を通して学んだこと、成長したことなどをふり返る。

②教材の開発と精選

この「学びのプロセス」を充実させるためには、教材によるところが大きい。子どもたちの心を揺さぶり，その感動を追体験してみたいと思えるような教材を探したい。つまり，子どもたちの中に，内発的な学習意欲が育ち，興味や関心が持続し，発展していくものが求められる。特に，生涯にわたって音楽を愛好する土台をつくるためには、歌唱であれば曲種に応じた発声を，器楽であれば様々な楽器に直接触れ，その楽器のよさや演奏する楽しさを体感するといったように、小中学校の間にいろいろな音楽の種を蒔いておくことが大切である。そして、自分の思いを生かした表現活動へと発展していくようにしたい。そこで、昨年度実施したカリキュラムをふり返り、このような学習にふさわしい教材であったかどうかを検討し、音楽を変えたり、同じ曲でもよりふさわしい音源や映像を探したりして見直しや修正を図っている。

また，子どもたちがゆとりをもって楽しい音楽活動を進めるためには，１題材の中に教材を盛り込みすぎないように，ねらいに応じて精選しなくてはならない。学習の主体が自分であることを意識するためには，子どもたちが自分で見いだした課題を追究したり，解決したりする時間的なゆとりをもつためである。１つの課題に対しても，様々な解決方法がある。比較して互いのよさに気づいたり，自分の活動に生かせたりするような学習が展開できるようにしたい。そのためには、本時の目標に対して、曲のどの部分を重点的に取り上げるかについても考えながら実践している。

（２）学びの質を高めるために

本校では、「子ども」「教材」「教師」の三者の関係から１時間１時間の授業を構成している。具体的にいえば、この子どもたちと教師（自分）が育んでいる学びの中で、この教材をどんなふうに学習していけば本時の目標に達成し、どのような見方・考え方・学び方につながっていくのかを考えて、授業をつくっていくのである。

今年度は特に、３つの点について探っているところである。

○子どもたちの主体的な学びをひき出す「活動」とはどのようなものなのか。 ○どうしたら、子どもたちが主体的に「課題」を捉えることができるのか。 ○「活動」の質を高めたり、「課題」を解決するための支援とは具体的にどんな内容なのか。

①「型をまねる」「技をぬすむ」という習得法

本校では２年前から，日本の伝統的な音楽における「型の伝授」からヒントを得て，あらゆる音楽に「型をまねる」（模倣）、あるいはさらに進んで「技をぬすむ」（抽出）といった習得法を積極的に取り入れる試みをしている。五感すべてを通して模倣は行われるが，音楽では主に聴いて模倣すること（耳コピー）と，見て模倣すること（目コピー）が中心となる。特に，日常は聴覚より視覚に頼ることが多いと思われるので，音楽の時間には耳コピーを大切にしている。

まず，音や音楽を聴いて「どこでどんなふうに演奏しているのだろう。」「どんな人たちの音楽なのかな。」といろいろな想像をめぐらせる。そして，実際に模倣していく中で，子どもたちは無意識のうちに様々な発見をしていく。なかなか自分に置き換えられないときは，周りの友だちを見て取り入れている姿もある。次に，実際の演奏や映像を見ることで確認し，目コピーによってさらなる発見をするのである。模倣をする際には，徹底した反復活動とその意味づけを行っていく。ただくり返すだけでなく，取り組むめあてが共有されて互いに評価できてこそ，次なる意欲へとつながっていくのである。学年が上がるにつれて、「見よう見まね」からより的確にその音楽の特徴を捉える「技のぬすみ」という習得法へと移行していくことを願っているところである。

模倣することは，その音楽にとっての「的確な表現」を体得することになり，さらに自分なりの「創造的な表現」が自ずと加わって「豊かな表現」へとつながるものと考えている。

②アンサンブルの効用と学習形態の工夫

音楽科において，本校が育てたい「かかわり合う力」「適切に判断する力」「自分を生かす力」を総合的に働かせることのできる場として，アンサンブルを取り上げたい。ここでいうアンサンブルとは，器楽合奏に限らず合唱も含めた広い意味で「複数でともに演奏する」ことをさしている。アンサンブルは，相手の立場に立って物事を考えたり，互いに共感したりすることのできる温かい心がなければうまくいかない。自分自身が感じ取ったり，考えたり，判断したことに基づいて，自分らしい声や表現の仕方で歌ったり，自分の演奏を友だちの演奏の中に溶け込ませたりするなど，自分のよさや可能性を生かしながら表現する力が要求される。

しかし，アンサンブルといっても，斉唱・合唱，同一楽器による合奏（リコーダー・鍵盤ハーモニカなど）・複数の楽器による合奏（リコーダー・鍵盤ハーモニカ・アコーディオン・木琴・鉄琴・太鼓類…）など多様である。また，学級全体からグループ，２人組まで様々な規模がある。それらを，いかにねらいに応じて使い分けていくかが重要である。たとえば，全体（本校では約４０名）でアンサンブルがうまくいかないとき，半分ずつ（２０名）で聴き合ったり，４グループごと（１０名）にまとめていったりすることができる。また，座席位置を活用して，縦列（５名ずつ）や横列（８名ずつ）で楽器のローテーションを行ったり，ペア・ワークでお互いの演奏を聴き合ったりするなど，機能的にしておくことも大切である。少しでも子どもたちで進められる部分を増やしていくことが，個への支援を働かせることにもつながるからである。

③支援と評価

授業研究を進めていく中で、「もっときれいな音で」「もっと表情豊かに」など、一見音楽的な支援のように聞こえるが，実はそのために何をどのようにすればよいのかという内容になっていなかったという反省に立った。指導案の中でも，実際の授業の中でも，全体に対する支援が中心で、個に対する支援があまりなされていなかったことに気づいたのである。子どもたちは，課題はぼんやりと見えてきたけれども，どうしたら解決に向かうのか手がかりが見つからないまま活動していたため、なか

なか活動の質が高まらなかったのである。「活動」「課題」からのアプローチによる授業を支えるものは支援であると述べたように，児童・生徒の学びの質を高めるのは，教師の支援によるところが大きい。様々な実態をもつ子どもたちのアンサンブルをよりよいものにしていくのは本当に難しい。しかし、考えてみれば、個に対する支援が少なかったことにその大きな原因があったのだと思う。そこで，個への支援を働かせるにはどうしたらよいかについて、これまでなかなかできなかった原因をふまえて研究することにした。

まず、目標達成に向けて「～している」という児童・生徒の様相をあらかじめいくつかにしぼって，見取りの視点をはっきりさせるようにした。そして、その様相に対する具体的な支援を考えていき、その際，子どもたちの表現を音の強弱や速度，音色やその変化といった音楽的な要素に置き換えながら，「何（どこ）が」「どのように」よいのかを認めたり，「何を」「どのように」したらよいか，新しい問題を投げかけたりして「活動」の質が高まっていくようにした。また、言葉に置き換えられない表現は、実際に歌ったり演奏したりすることもある。

このような支援を働かせるためには、教師が一人一人の児童にかかわれるような学習の進め方を考えておく必要がある。発達段階や学級の実態によって、主に次のような方法を用いている

○小グループ単位で演奏する。
○１人、あるいは数名ずつ加わりながら演奏する。
○反復やローテーション、ロンド形式（全体→グループ→全体…）などにより、子どもたちが進められる体制をとる。

また，音楽的な技能については身についてこそ生きて働く力となるので，教師が指導すべき点はしっかり指導し，子どもたちにはそれによって自分の表現がどう変わったのかを感じ取らせるようにしている。子どもたちの使える技能が増えることが，学びの質を高めることにつながっていくと考えるからである。

さらに，子どもたちが教師がともに確かめ合う場を設けることが必要である。実際に聴き合ったり，録音したものを客観的に聴いたりして，子どもたちが互いの成果を評価できる力も育てていきたい。その力が，自分たちで「課題」を発見する力へとつながっていくからである。「課題」からのアプローチの授業で、一部の子どもたちしか「課題」が発見できないのは、評価する力がまだ育っていないからだと捉え、ふり返りのワークシートで自分たちの音楽や自分の表現に対して的確な評価をしているものを紹介するようにしている。

４　授業の実際と考察

Ⅰ「活動」からのアプローチの実践例

中学校１年生「アメリカ・アフリカの音楽～ゴスペルを歌おう～」

（１）実施日および学級・授業者

・２００６年7月１０日（月）３校時
・１年Ｄ組　３９名，授業者　霜村真由美

（２）授業構成

（略）

（３）題材の目標

・ゴスペルの歴史的背景、歌に込められた意味について知る。
・ゴスペルを歌うための発声法・リズムの取り方・アドリブの入れ方などを習得する。
・コール＆レスポンス形式で、それぞれの自己主張、自己表現を入れ、ゴスペル曲を楽しく歌う。

（４）学習計画（全　時間）

第１次　ゴスペルとの出会い　（１時間）
第２次　ゴスペル風に歌う「聖者の行進」に挑戦！　（１時間）
第３次　「Oh Happy day!」に挑戦！　（３時間）本時２／３
第４次　ゴスペルの魅力　（１時間）

（５）本時の学習について

①本時の目標

・ゴスペルの歌に込められた思いを、声と体で表現する。

・コール＆レスポンスをしながらだんだん高まっていくことを楽しんで歌う。

②本時の課題

どうすれば全身で歌えるのか。喜びを表現できるのか。

③本時の課題から期待される生徒の活動

ア　力強く太い大きな声で歌うこと。

イ　黒人たちの思いを想像してみる。

ウ　ハンドクラップやステップで表現する。

④本時の展開　（○教師の意図　◇全体への支援　◆期待される活動が発展しない場合の支援）

学　習　活　動	教　師　の　支　援　・　意　図
１．歌うためのウォーミングアップをする。 ・体ほぐし（首回し・首筋のばし・肩回し・腰回し・手足ぶらぶら） ・表情作り（眉上下・頬しわ・顎左右・舌出し入れ） ・支え作り（つま先・かかと立ち・腹筋鍛え 15 秒） ・ロングトーン１５秒　　・イエアオウー	○歌うときに声を出しやすくしたり、体をほぐして動きやすくするために行う。 ◇この運動は全身で歌うために、体を脱力させ、腹筋を使った力強い声を出すために行うことを説明する。
２．ゴスペルの意味を思い出す。	○ゴスペルの歴史的背景や意味に意識を向けることで、全身で歌うことに気づかせたい。 ◇ビデオ「1 分間でわかるゴスペル」を視聴させる。
３．今日の目標を確認する。 「Oh　happy　day!」を視聴する。	
ビデオのように歌って「喜び」「楽しさ」を表現しよう！	
＜予想される内容＞ ア：メロディーを覚えていないので何回も歌ってみる。 イ：嬉しかったことを考えて歌う。 ウ：大きな声を出す。	○今まで学習してきたことを生徒たちがどのように生かしていくかを期待したい。 ◇前時のワークシートに書かれていた友達の感想を紹介する。(「お腹の底から出るような大きな声で歌いたい。」「黒人たちにとって歌は生きる喜び。だから明るく楽しく歌いたい。」)
４．「Oh　happy　day!」の練習をする。	
（アに対する指導） ・メロディーを覚える。	◆ララでメロディーを歌ってみる。 ◆コール＆レスポンスで何度も歌ってみる。
（イに対する指導） ・黒人の歌への思いを考える。	◆ビデオ「現在教会で歌っている様子」か映画「アフリカの蹄」の一部を視聴させる。
（ウに対する指導） ・腹筋を使って歌う。 ・口の開け方・発音の仕方を	◆応援団の声の出し方を思い出させる。 ◆「せーのぉ」を腹筋を使って大声で言う。 ◆母音・子音の早口練習をする。

確認する。	◇変化が現れればその都度ほめて、意欲をかきたてる。
５．まとめの演奏を録画し、それを聴いて本時のふり返りを書く。	◇今日の目標がどのくらい達成でき、自分たちがどんなことに気づき改善したかを書くように促す。

■授業研究会で明らかになった成果と課題

○本時の授業は「課題」からのアプローチとして構成したが、それが適切であったか。

今回の時点では、まだ「活動」からの方が自然であったし、「活動」をやっていく中で生徒たちはゴスペルの楽しさや、どうやったらもっと馬ｋなれるだろうというような「課題」が生まれてきたように思う。まだ歌う技術もゴスペルの良さも不十分な状態で「さぁ課題を見つけよう。」という設定は時期が早すぎて、生徒たちもどうすればいいのか困ってしまった場面が多かった。結局、教師が主導で「活動」させてしまった感がある。もしこの教材で「課題」からのアプローチで授業を展開するとすればもう少し歌を習得したあとで取り組めばできるのではないか、と思う。

したがって、**本時の授業は「活動」からのアプローチで展開した方が適切と思われる。**

○全体への支援は分かるが、個への支援が弱い。

○個への支援が必要だとしたらどんな支援を行うのか。

・うまく歌えている生徒のそばに連れて行って見ながら歌わせる。

・注意すると萎縮してしまうので、良い活動ができている生徒を取り上げてほめる。

・「大きな声を出す」ではなく、腹筋の使い方を意識できるようにする。

・「大きな声」ってどんな声か考えさせる。

○グループ活動の中での個の支援で困る点はどこか。

・達成する重点を絞らないと１時間ごとのねらいへの達成感が得られていないように思う。

○ねらいにある理想像と子どもの伸びで満足感が得られるような支援ができていない。どこでよしとするか予想できない。

○期待する活動は教師の理想で、＜予想される内容＞は予想できる子どもの活動。

○音楽で身体表現を取り入れると、声に対する支援がおろそかになってしまいやすい。そのため「大きな声で」では声への意識が出にくいため音程に関わることなどを支援に入れていく必要がある。

○ゴスペルを歌った実際の成功例（同じ世代の）はあるのか？　効果的な支援はあるのか。それとも課題の設定が高すぎるのか、そういった部分も吟味していかなければいかないのでは？　ねらいの部分も変わってくるのではないか。

○支援ばかり考えるのではなく、元々のねらいの部分を十分に吟味する必要がある。子どもたちの実態と教材、そこから見てねらい達成可能かどうかを考える必要がある。

■共同研究者の小川容子先生からのコメント（録画ビデオを見て）

・良かった点

（１）冒頭のウォーミングアップは素晴らしい。

（２）授業の中で見せている VTR はなかなか効果的である。

（３）最後の１０分（＝模範ビデオを一緒に歌う部分）は、子どもたちが良く集中している。

・今後の課題

（１）基本的な発声法を指導してほしい。

（２）一斉指導ではなく、個別指導がほしい。

（３）「盛り上がる終わり方」は次週でも良かったのではないか。

（４）一人ずつの視唱の場面がほしい。

・まとめ

「どうすれば全身で歌えるのか」という課題そのものは、良い。しかし、子どもたちに基本的な声の出し方や口の開け方、腹筋の使い方を教えていないので、「課題」と「実際の授業活動」が遊離している。中学生に要求される「真似」は、見かけ上の「ものまね」ではなく、本物の追究をさせる

必要がある。そのためには、基本に立ち返ること（＝基礎の徹底指導）を授業の中心に据えて展開しなければならない。

■改訂版指導案

校内授業研究会での協議と共同研究者からの指導を元にして、「活動からのアプローチ」の授業構成と具体的な支援を捉え直し、本時の授業についてを書き直してみた。

○「活動」からのアプローチの授業展開に変える。
○課題を発見するための活動を考え、授業の中で仕組んでいく。
○全体の支援だけでなく、個への支援をより具体的に考え、記述する。

（５）本時の学習について

①本時の目標

ゴスペルの特徴である「コール＆レスポンス」を体感することで、歌いながら気持ちが高まっていく（歌うことで気持ちが発散できる）という魅力に気づく。

②本時の活動

ゴスペルを歌っているところを視聴したり、「Oh　Happy　Day!」を映像とともに歌ったりする。

③期待される生徒の様相

・歌詞やメロディーを習得して自信を持って声を出して歌う。
・コール＆レスポンスのタイミングをつかみ、だんだん力強い歌い方にする。

④本時の展開　（○教師の意図　◇全体への支援　◆個への支援）

学　習　活　動	教　師　の　支　援　・　意　図
１．歌うためのウォーミングアップをする。 ・体ほぐし（首回し・首筋のばし・肩回し・腰回し・手足ぶらぶら） ・表情作り（眉上下・頬しわ・顎左右・舌出し入れ） ・支え作り（つま先・かかと立ち・腹筋鍛え 15 秒） ・ロングトーン１５秒　　・イエアオウー ・既習曲「聖者の行進」を歌う	○歌うときに声を出しやすくしたり、体をほぐして動きやすくするために行う。 ◇「ゴスペルは気持ちが晴れるくらい大きな声を出すこと！」と助言する。 ◇リズム CD に合わせて体を動きやすくする。 ◇テンポをどんどん速くしていき、体の動きとともに声も高まっていくようにする。
・体を動かしている状態から自然に声を出して既習曲「聖者の行進」の歌に入る。 ・いろんな位置（頭の上・顔の横・胸の前）でハンドクラップをし、リズムにのる。	◇この運動は全身で歌うために、体を脱力させ、腹筋を使った力強い声を出すために行うことを説明する。 ◆個々の生徒の姿勢、口の開け方、声の太さを見て回り、できていない生徒には教師がやって見せたり、できている生徒のそばに場所移動をさせ真似てやるよう助言する。

＜個への支援例＞

・肩幅ぐらい足を広げて立ってみよう
・口を開けたとき指が縦に 4 本ぐらい入るくらい開けよう。
・目の奥のもう一つの目を開ける感じで歌おう。
・音の階段は手の高低で表してそれに合わせて歌ってみよう。
・丹田と喉はまっすぐにつながっているのを意識しよう　　。
・胸はもっと張って歌おう。隣の人の分も空気を吸うくらいのイメージで。
・口の中にリンゴが一個入るくらい開けよう。
・あくびをするように息を吸おう。
・音の階段を上がるように声を出してみよう。
・お腹のへその下（丹田）をきゅっと締めよう。
・お腹を出さない。背中を丸めない。

２．ゴスペルの意味を思い出す。	○ゴスペルの歴史的背景や意味に意識を向けることで、

	全身で歌うことに気づかせたい。 ◇ビデオ「1 分間でわかるゴスペル」を視聴させる。
3．ビデオで「Oh happy day!」を視聴し、より近づけるよう歌う。 ①メロディーを覚えるまで歌う。 ・コール部分の歌唱 ・レスポンス部分の歌唱 ・全体で歌う部分の歌唱	○映画「天使にラブソングをⅡ」の「Oh happy day」を歌っているシーンを視聴させる。 ◇歌詞やメロディーを覚えるため、メロディーを聴き、そして歌うという活動を繰り返す。 ◇難しい言葉のところは「早口言葉」や「3 回繰り返して言う」をゲームを取り入れて行う。
②コール＆レスポンス部分を、コールとレスポンスに分かれて歌う。 ・教師：全員 ・男子全員：女子全員 ・男子１列目：他全員 ・希望者数名：他全員 ・代表者１名：他全員	○互いに歌うコール＆レスポンスを体感することで、気持ちの高まりを感じ取らせる。 ◇同じ曲を歌っている先輩のビデオや現在教会で歌っているプロのゴスペル隊を視聴させ、コール＆レスポンスをするたびに声が大きくなっていく様子を感じ取らせる。 ◇先輩と同じように動作や声量を大きくするよう助言したり、教師が生徒とともに歌ったりする。 ◆歌っているとき、手鏡を見せながら個々の笑顔チェックをして、口を大きく開けたりほお骨をあげて歌えるよう意識させる。 ◇映画「天使にラブソングをⅡ」の中の『Oh happy day』の CD（or DVD）を流しながら、それに合わせて歌わせる。 ◆変化が現れればその都度ほめていく。
4．自分たちの歌を録画し、それを聴いて今後の課題を見つける。 ・曲の最後に向かって、もっと盛り上げたい。 ・「ゴスペル＝良き知らせ」なのだから、全身でもっと楽しさを出したい。	◇課題を発表させ、いくつかの課題から「ゴスペルの楽しさを出すにはどうすればよいのか」という点を共有し、次時につなげる。 ◇振り返りカードに今日の活動の感想と、ビデオを見て明らかになった問題点を書くように促す。

Ⅱ「課題」からのアプローチの実践例　　小学校５年生「ひびけ！合唱～３部合唱に挑戦～」

（１）実施日および学級，授業者

・２００６年5月１５日（月）３校時

・５年２組　３７名，　授業者　桝田祐子

（２）授業構成

（略）

（３）題材の目標

・様々な合唱曲を鑑賞することによって，声の種類や合唱の形態，背景について知る。

・声の重なり合いや響き合いを楽しみながら，それぞれの合唱曲にふさわしい表現を工夫する。

（４）**学習計画（全７時間）**

第１次　４つの合唱曲との出会い（１時間）

第２次　「花のおくりもの」に挑戦（３時間）　**本時３／３**

第３次　「こげよマイケル」に挑戦（２時間）

第４次　いろいろな合唱のみりょく（１時間）

（５）本時の学習について

①本時の目標

声の響きや重なりなどに気をつけながら，３声の「花のおくりもの」を仕上げていく。

②本時の課題

どうしたら３声の「花のおくりもの」を美しく歌いあげることができるか。

③本時の課題から期待される児童の活動

ア　きれいな声をしっかりと出す工夫をする。
イ　各パートの出だしをはっきりさせる工夫をする。
ウ　声のばらつきをなくす工夫をする。

④本時の展開　（○教師の意図　◇全体への支援　◆期待される活動が発展しない場合の支援）

学　習　活　動	教　師　の　支　援　・　意　図
１．音楽に合わせて，ストレッチ運動をする。	○歌う際に余計な力が入らないように，体をほぐすために行う。
２．今日のめあてを確認し，それを達成するためにはどうしたらよいか考える。	○まず，もっと互いの声が聴き合える隊形（円）に変えてから２声のカノンを歌い，意欲を高める。 ◆隊形が思いつかない場合 ・１６世紀のヨーロッパの人たちが円形でカノンを歌っている絵を見せる。
３声の「花のおくりもの」を，ＣＤのように美しく歌いあげよう！	
＜課題＞ **ア　きれいな声をしっかりと出すにはどうしたらよいか** **イ　出だしをはっきりと歌うためにはどうしたらよいか** **ウ　声のばらつきをなくすにはどうしたらよいか**	◇本時は目標にしているＣＤと同じ３声に挑戦することを確認する。 ・これまで学習してきた内容を，子どもたちがどのように生かしていくかを期待したい。 ◆前時のワークシートに書かれていた内容を紹介する。。 「天使の声をめざす」「出だしにみがきをかける」 「心を落ち着かせよう」など
３．３声の「花のおくりもの」を実際に歌ってみる。 **・３つのパートに分かれる** **・気づいた点を直していく** ＜イとウに対する指導＞ **・きれいな声をみつける** **・きれいな声に合わせる**	◇３つのパートに分けた経験がないので，児童からよい方法が出ない場合は同じ人数ずつに教師が分ける。 ・バランスが悪かったら人数を変えればよいことも示す。 ◆パートの声がまとまらない場合 ・きれいな声で音程のとれている児童を核にして，１人ずつ増やしていく。 ・目を閉じて歌う ◇問題点ばかりに目を向けないように，よくなった点も見つけていくようにする。
４．自分たちの合唱の録音を聴いて，さらに改善する。 ＜アに対する指導＞ **・頭声的な発声の仕方** **・歌詞の世界をイメージする**	○児童がある程度満足できる合唱になってから，録音するようにしたい。 ◆歌声が暗く，音程が下がる場合 ・理想とする表情の写真を提示する。（眉・目に着目） ・児童の歌う表情を録画し，写真と比べる。 ・歌詞の意味を考えるための掲示物を貼る。

5．まとめの演奏を録音し，それを聴いて本時の学習のふり返りを書く。	○今日のめあてがどのくらい達成でき，自分がどんなことに気づいたり改善したりしたのかを捉える。

参考文献：ニューグローブ世界音楽大事典，講談社　音楽大事典，平凡社

■授業研究会で明らかになった成果と課題

○「頭声的な発声」と「パートの声をそろえる」という２つの課題の支援が交錯してしまった。

○学び方の積み上げが必要である。課題に気づくことはできても，自分たちでそれを解決していく活動にはならない。

○音楽科の場合は，話し合いではなくて，実際に歌う，演奏するといった音楽表現で解決することになる。子どもなりの手だてを考えさせると，話し合いのウエイトが大きくなるので，音楽科における課題の解決に合わなくなる。そのため，今回は，教師の支援が多くなった。しかし，子どもたちでうまく解決できた体験があれば，課題の解決が子どもたちの手で行われるようになると思う。

○いろいろな学習の形態によって，課題に向かう経験をすることで少しずつ課題への取り組み方，学び方が見えてくるのだと思って参観した。

○無伴奏で歌うことが初めに位置づいていたが，効果的だった。

「耳コピー」のみでいこうと思っていたが，大学の先生から「目コピー」も取り入れた方がよいのではという助言があり，模範となるような歌っている顔の写真を提示した。その写真にもとづいて，「アー。」「イー。」などの声を表情に気をつけて出させればよかった。そうすることで，目コピーを授業に取り入れたよさが出てくるのではないかと思った。

・顔の写真から，鏡を見せるのではなく，子ども同士で「いい表情」の友だちを見つけ合っていくといった学び合いを促したり，支援を入れてたりしていってはどうか。友だちの顔を見ながら歌うことで，歌うときのよい表情が得られていくのではないか。

→上手に表現できている子を取り上げることによって，その他の児童も自分を見つめ直す場にすることもできるので，効果的な方法だと思う

■共同研究者の小川容子先生（鳥取大学）からのコメント

（授業当日が出張だったため，録画ビデオを観ていただいた。）

・素晴らしい点

（１）模範となる写真（歌っている子ども）の提示
（２）「天使の声」の子ども達を抽出し，その子ども達の声に数名ずつ声を重ねた点
（３）鏡の提示
（４）グループ別の指導で，どのように声を出すか，どんどん指導した点
（５）無伴奏で歌わせた点
（６）子ども達を円形にした点
（７）随時，教師の範唱を聞かせた点

・こうしたらどうかの提案

（１）もっともっと教師が主導でよい

映像からは，子どもに遠慮しているような感じがしました。ひょっとしたら，下の課題（＝「研究のまとめ」P.5-6)が原因でしょうか？子ども達に，「自分達の歌声をどうしたらいいか」と問うことは，あまりにも無謀な課題です。恐らく，子ども達自身，歌っている時に「何か変だな」という意識があるだけでしょう。つまり，「どこが，どのように」変だということは，教師が指摘しなければわからないと思います。

例えば，最初の「は」の発声の仕方，「さいた」の「た」ピッチが下がっていること，「ほとり」の音程が狭くなっていること，「ふたり」の「ふ」の発声がまろやかでないこと，「あんだ」の「あ」が

正確に発声できていないこと，その次のフレーズの「C#」がとれていないこと，さらに，３のフレーズは，ほとんどのピッチがフラットしていること---等など。これらは，一つずつ丁寧に，「指摘＋指導」しなければならないでしょう。

（２）「しっかり声を出す」ことと，「きれいな声を出すこと」のどちらかにしぼる

大人の場合は，発声訓練がきちんとできていれば，しっかりした頭声＝きれいな頭声になるのですが，子どもの場合は，別々な概念としてとらえられています。つまり，「しっかり声を出そう」という指導と，「きれいな声で響かせよう」という指導は，子どもにとっては，逆の発声をイメージさせるようです。ですので，「天井まで響かせよう」とか「しっかり息を吸ってから声を出そう」「口を大きくあけよう」といった指導のほうが，子どもにとっては分かりやすかったと思います。

（３）鏡の使用

録音と鏡の２つを同時におこなおうとしたために，不十分な活動になってしまった，これは事実ですね。でも，今回は，「録音」よりも「鏡」を使用した方が良かったように思います。例えば，「手鏡」を一人ずつ用意させて，自分達の口の開け方を確認させるということも面白かったかもしれませんね。

（４）自分の声と対峙させる

子ども達一人ひとりが，「自分の声」を知らないような感じがしました。自分の声がどのように響いているのか，相手にどのぐらい聞こえているのか，どのように聞こえているのか，こうしたフィードバックを行わせたいですね。例えば，筆箱の上部分（昔，ありましたね）を耳にあてて自分の声を聞かせる，などという古典的な方法もありますよね。

■改訂版指導案

校内授業研究会での協議と共同研究者からの指導をもとにして，「課題からのアプローチ」の授業構成と具体的な支援を捉え直し，（５）本時の学習についてを次の点に留意しながら書き直してみた。

○本時の目標表現をより明確にする。
○期待される児童の様相を具体的に記述する。
○課題を発見するための支援を考える。
○活動の質を高めるための個への支援を考える。

（５）本時の学習について

①本時の目標

頭声的な発声や音程に気をつけながらパートの声をまとめることを通して，３声によるカノン「花のおくりもの」の声の重なりを楽しむ。

②本時の課題

・無理のない響き合う声を出すにはどうしたらよいか。（頭声的な発声）
・パートの声をまとめるにはどうしたらよいか。（声質・音程）

③期待される児童の様相

ア　姿勢・表情・呼吸に気をつけて，頭声的な発声や，正しい音程のとり方を工夫する。
イ　表情に気をつけて，無理のない明るい声が出るように工夫する。
ウ　音程がとりにくいところを意識して，正しくとれるように工夫する。

④本時の展開（○教師の意図　◇全体への支援　◆個への支援）

学　習　活　動	教　師　の　支　援　・　意　図
１．音楽に合わせてストレッチ運動をした後，互いの声が聴き合える隊形（円）になって２声のカノンを歌う。	○歌声を響かせるために，余計な力が入らないように体をほぐし，円形で歌うことから聴き合うことの大切さを実感させる。 ◇児童が隊形を思いつかない場合は１６世紀のヨーロッパの人たちが円形でカノンを歌っている絵を見せる。
２．「今日のめあて」を確認し，それを達	○これまでの学習を生かして、自分たちで課題をみつけ

成するためにはどうしたらよいか考える。	るようにさせたい。

３声の「花のおくりもの」を，ＣＤのように美しく歌いあげよう！

①３つのパートに分かれて，３声によるカノンを歌う。 ②自分たちとＣＤのカノンを聴いて，自分たちの問題点をみつける。 ＜予想される内容＞ ・天使の声になっていない →　響きが暗い，音が下がっている 力が入りすぎている ・パートの出だしがそろっていない →　パートの声をまとめなければ ・声のばらつきがある →　音の高さがそろっていない 声が下がっている人がいる	◇できるだけ CD のような合唱をめざして歌うように促し，録音することもあらかじめ伝えておく。 ◇自分たちとＣＤの合唱の違いは何かな。 〇比較しながら聴くことで，自分たちの課題に気づかせたい。 ◆なぜ「天使の声」じゃないと思ったのかな。 ◆出だしをそろえるためには，呼吸だけでなく声もまとまっていないといけないね。 ◆声のばらつきは，発声以外にどんな原因があるかな。

課　題　**・無理のない響き合う声を出すにはどうしたらよいか。**
・パートの声をまとめるにはどうしたらよいか。

３．３声の「花のおくりもの」を歌いながら，問題点を改善していく。 ・３パートに分かれてみんなで歌う ・みんなで同時に歌う ・パート別に歌う ・頭声的な発声で音程の正しい児童を核に，１人ずつ増やして歌っていく。	〇児童の合唱を聴いて，どちらの課題から迫るかを判断し，内容にふさわしい学習形態を選択していく。 ＜頭声的な発声法に関する支援＞ ◇理想とする表情の写真を提示する。 ◇手鏡で自分の表情をチェックするよう促す。 ◆頭声的な発声法がつかめない児童に対する支援 ・歌う姿勢はできているかな ・もっと眉を上げて　・目をぱっちり開けよう ・笑顔で歌おう　・額から声を出す気持ちで ・鼻から吸った息で喉の奥が涼しくなるところに息を当てるようにして出してみよう ・目を閉じて，歌ってみよう ・自分の耳に手をあてて響きを確かめてみよう ・（範唱して）まねてごらん ＜音程に関する支援＞ ◇ピアノに合わせて歌ってみよう。 ◇耳に手をあてて，自分の音程を確かめてみよう。 ◆音程がなかなか正しくとれない児童に対する支援 ・正しい音程の友だち（教師）と歌ってみよう。 ・音の高低を手で示して，音の高さのイメージをもちながら歌ってみよう。 ＜さらによりよい歌い方をめざすための支援＞ ◆頭声的な発声で音程が正しい児童への支援 ・いい声になってきたね。その声をパートの後ろから出してみんなの声をまとめていって。 ・自分の声でみんなの声を包むような響かせ方をして

	みてごらん。 ○頭声的な声が合わさると響きが倍増することや，発声法と音程がよくなれば響きがきれいになることに気づかせたい。
４．自分たちの合唱の録音を聴いて，さらに改善する。	○児童がある程度満足できる合唱になってから，録音するようにしたい。 ○問題点ばかりに目を向けないように，よくなった点も見つけていくようにする。
・歌詞の世界をイメージする	◇歌詞の意味を考えるための掲示物を貼る。 ミュシャの絵画
５．最後に歌ったカノンと始めのカノンを比べながら，本時の学習のふり返りを書く。	○今日のめあてがどのくらい達成でき，自分がどんなことに気づいたり改善したりしたのかを書くように促す。

５　成果と課題

○本校の「授業づくり」を通して、１時間の授業の組み立てが明確になってきた。

●どんな活動を中心にもってくるか

・教師や友だちの演奏音源、ビデオによる映像を見たり聴いたりしながら、自分の演奏を追究していく活動は、自分がやるべきことが明確になるためか集中して取り組みやすい。

・アンサンブルを通して、どの学年も友だちと合わせることの難しさと喜びを感じている。速く弾けない友だちに合わせたり、音の大きさを加減したりして、相手のことを考えながら演奏するようになってきた。

●どんな課題が生まれるか

・児童生徒の視点に立って、課題発見の手だてを考えるようになった。

・主体的な学習への第一条件だと考えるようになった。

●どんな支援内容がふさわしいのか

・期待される様相とその支援をあらかじめ考えることにより、児童生徒の見取りの視点が明確になってきた。

○個への支援とその履歴をどう残していくのか。

・個への支援も考えているが、なかなか思うようにできない難しさがある。

・教師の支援がその子にとっての大切な評価なので、「ふり返り」の中に、先生にどこをどんなふうにほめられたのか、どこをどんなふうにしようと言われたのかを書き留めるようにさせたい。

○授業評価をどう活かしていくのか。

・子どもと教材、子どもと教師、教師と教材という三者の関係から、児童・生徒に育てたい資質・能力とそれに適した教材を見直していきたい。

（参考文献）

金本正武，子供と音楽のかかわりを深める音楽科授業論，東洋館出版社，1997

金本正武・小原光一，新しい教育課程と学習活動の実際「音楽」，東洋館出版社，1999

峯岸　創，音楽教育が変わる「遙かなる過去の呼び声」と感応する音楽教育，音楽之友社，2001

SERENO　CD-ROM 版音楽科教育実践講座　理論編，ニチブン，2004

高須　一，子どもにとって学びがいのある音楽科授業を創造する－音楽の学力をめぐって－①～⑯，
音楽鑑賞教育　2004 年 2 月号～ 2006 年 9 月号